

30amE-185

大学教職員を対象とした特定健診における腹囲の測定評価と生活状況調査の有用性
○川崎 直人^{1,2}, 富永 壽人¹, 緒方 文彦¹, 佐川 和彦²(¹近畿大薬, ²近畿大アン
チエイジングセ)

【目的】2008年4月より、生活習慣病を予防する目的として特定健診制度が導入された。しかし、WHOの腹囲の診断基準は、女性より男性の方が高い値に設定されており、日本の診断基準の妥当性が問題視されている。本研究では、特定健診を受けた教職員の結果を用いて、腹囲測定の正確性の評価ならびに腹囲基準の違いによるメタボリックシンドローム (MetS) およびその予備群 (Pre-MetS) の割合への影響および MetS と生活状況との関連性について検討した。

【方法】本研究は、近畿大学薬学部倫理委員会の承認に基づき、インフォームドコンセントや個人情報保護に配慮して実施され、同意の得られた教職員のデータを用いた。腹囲測定の誤差評価は、腹囲の増減と Body Mass Index (BMI) の増減との関係から評価した。また、特定健診の検査項目の年度間の差ならびに腹囲と健診結果および生活状況に関するアンケートとの関連性を評価した。統計処理および有意差検定には、Windows JMP ver. 10.0.0 (SAS Institute Inc.) を用いた。

【結果および考察】腹囲誤差については、男性では3.6%、女性では2.6%の確立で測定誤差が生じている可能性が示唆された。男性の血糖値 (BS) および女性の腹囲は経年的に有意に増大したが、MetS および Pre-MetS の割合には、変化がなかった。また、腹囲は、血圧、中性脂肪 (TG)、BS との間に正の相関が、HDL-コレステロール (HDL-C) との間に負の相関が認められ、腹囲測定は、高血圧、脂質異常症、高血糖の対象者を明らかにする指標になることが示唆された。また、生活状況に関するアンケート結果から、血圧降下薬の有無、体重増減、運動習慣、食習慣などの項目は、腹囲と関連性が認められた。以上の結果から、腹囲は生活習慣病を予防するための情報を得るために有用であることが示唆された。